

つても使用できるように改良され、とても便利になりました。始めてダイヤルを回す時、手がふるえたことを覚えています。我が家に有線が入った時みんな喜んでしまいました。その有線も残り少なく、十二月末日で聞かれなくなると思うと残念ですが、これも時代の流れとして仕方

思い出の有線放送

宝米 布施利江

私は昭和四十年から四十二年までの二年間、有線放送室にお世話になりました。四十年三月末、高校卒業と同時に役場に就職し、放送室勤務との辞令を受けて、案内されたのが有線放送室でした。自分では役場に入ったら、てっきり事務系の仕事ができるものだ、希望に胸をふくらませ珠算や文字を練習していたのが、一瞬にして打ちのめされた感じがしました。初めて案内された放送室には、大きな有線の交換台が中央に置かれ、重苦しささえ感じられ、交換

ない事だと思いません。最近には取り付けられた「防災行政無線機」から流れる時報を聞く心が落着くようになりました。これからは家族の一員として新しい無線機と共に暮らして行きたいと思えます。有線放送に長い間ご苦勞様でしたと家族一同申し上げます。

務になれるのを、待ちに待っていたものでした。新米二人ルンルン気分が組んだ夜勤の事、夜九時の放送終了のテープ操作をまちがえてしまっただあわて、「ねえ、ねえ、どうしよう」、「テープの代わりに、生放送しちゃおうか」二人で悪戦苦闘。その場しのぎはしたものの、この失敗の舞台裏が全町放送で流れていたとは……。そして一夜明けると

又、原稿を読みちがって忠



発表する布施さん

告を受ける事も度々ありました。原稿の下読みの時間もわずかで、ざっと目を通す程度で「いざ本番」になるので、今のテレビラジオのアナウンサーのような訳にはいきませ

ん。あの当時は放送の中に「県庁だより」のコーナーがありました。特に地名等はむずかしく印旛郡栄町「安食」の地名を「アングイ」と読み、すずしい顔で放送を終わり食事をしていると、交換台のランプが異常に点滅して「姉ちゃんアングイでねえヨ、アジキだよ、アジキと読むんだヨ」。「どうもありがとうございます。あ、またやってしまった。でもこの父ちゃんも私の味方、有線放送聞いてくれたんだな。とうれしく思ったものでした。私達交換手の相手は「町民の声」声だけの応待なので感情の行き違いから、トラブルが生じる事もありましたが、反面、仕事になれてくると、人情味あり、多くの人々との触れ合いありと、楽しさも加わってきました。また、当時は電話の普及率が低かったため、電話連絡という話の「はしわたり」たるものも、重要な仕事の一つでした。他町村の親せき、知人等から放送室に電話がかかり、「〇〇回線の〇〇番に電話連絡をお願いしま

す。私達交換手は、右手に電話の受話器、左手に有線の受話機を持ち、話の「はしわたり」をしていました。田植えの時期になると、農家の方は「苗が足りなくて困っているから探してもらいたいけどねエ。」苗代の苗が一本分あまっているから取りに來ればいいヨ。養豚家の方は「豚の去勢お願いします。」「わかりました。すぐ伺います。」等々、本になつたかしい思い出です。私は二年間の短かい期間の勤務ではありましたが、先輩の方々や、加入者の皆様方の暖かいご指導をいただきました。無事勤める事ができました。私にとって貴重な体験でした。この職場を去り二十二年の年月が流れ去りました。十二月いっぱい加入者の皆さんとの情報伝達の役割を担ってきた有線がなくなるといふ事で、二年間だけのおつきあいではありましたが、一抹の淋しさを感じて居ります。長い間の活躍ごころうさまでした。